昭和維新の歌

JJ1SXA/池

以下は、昭和５年５月海軍中尉三上卓作詞・作曲「青年日本の歌」、別名「昭和維新の歌」の歌詞の一部です。

「泪羅の淵に波騒ぎ　巫山の雲は乱れ飛ぶ　混濁の世に我立てば　義憤に燃えて血潮湧く」「権門上に傲れども　国を憂うる誠なし　財閥富を誇れども　社稷を思う心なし」「ああ人栄え国亡ぶ　盲たる民世に躍る　治乱興亡夢に似て…」後略

三上卓は、1932 年 5 月 15 日の 5.15 事件（武装した大日本帝国海軍の青年将校たちが総理大臣官邸に乱入し、内閣総理大臣犬養毅を殺害した反乱事件）に連座し、反乱罪で死刑を求刑されるが、同罪で禁固 15 年の判決を受け、小菅刑務所に服役、戦後の 1961 年 12 月 12 日の三無事件（無税・無失業・無戦争の 3 つの無を掲げ、旧日本軍の元将校らが画策したクーデター未遂事件）に参加したとして逮捕されるが、起訴猶予で釈放されている。（初めて破壊活動防止法が適用された事件）

1936 年 2 月 26 日から 2 月 29 日にかけて、政治家と財閥系大企業との癒着が代表する政治腐敗や、大恐慌から続く深刻な不況等の現状を打破する必要性を声高に叫んでいた日本の陸軍皇道派の影響を受けた青年将校らが 1483 名の兵を率い、「昭和維新断行・尊皇討奸」を掲げて起こしたクーデター未遂事件が 226 事件だが、いずれも、世相不安と政治腐敗がからんで、義憤に燃える若者が決起している。

三島由紀夫は、226 事件の真髄に迫ったあたりから、右傾化は極限に進み、盾の会を結成して運動を進め、挙句、憲法改正を掲げて、自衛隊にクーデターを起こせと檄を飛ばすも、失敗に終わり切腹自決という結果を招いたが、「憂国」、「十日の菊」、「英霊の声」の、226 事件の三部作で真意が伺える。

226 事件は明治維新から 68 年後に起きている、新政府の組織は先進的で優れたものだったが、システムは硬直化し、利権は一部に偏っていた、国家の危機的な状況にあっても惰眠を貪る輩を一掃する必要があったのだ、それは、戦後 68 年を経た現在の状況にも似通っている、そのまま今の時世にも当て嵌まるような気がする。

国会（予算委員会）で、閣僚の靖国参拝を批判し、拉致家族の名前を出して捏造話をする民主党議員、靖国参拝を批判しているのは中国、韓国だ、靖国参拝を控えれば、尖閣問題や、従軍慰安婦問題が簡単に片付くとでも言うのか、また、尖閣問題は棚上げにするという話があったと中国で話をする馬鹿な元自民党議員、枚挙すればきりが無い、何処の国の人間だと言いたい人が多い。

混濁の世の今こそ、この「昭和維新の歌」を、これ等永田町の売国政治家、媚中財界人、そして反日マスコミとそれにに踊らされる人々に味わってもらいたい、義憤に燃える、この若者の悲痛な叫びに真の日本人の心を取り戻してもらいたい。

（21,Jun,2013 記）